



ザンビアの空

HIV陽性の女性たち



JICA専門家
(HIV/AIDS及び結核対策プログラムコーディネーター)
座間 智子

ザンビアの空は抜けるように青く、そこにポッカリと白い雲が浮かぶ風景は、のんびりとした心豊かな気持ちにさせられます。首都ルサカの町には、低所得者層の人々が居住するコンパウンドと呼ばれる地域が点在し、赤土の土壤にブロックで積まれた家々、マーケット、学校、路上の物売りが所狭しに建ち並ぶ中、人々が生活しています。

7月のある日、コミュニティースクールの先生から「私たちの活動を見に来ませんか？」との誘いを受けました。この時期のザンビアは乾季で雨が降りません。砂埃にまみれながらその学校を訪ねると、教室には、約20名の女性たちが集まっていました。ザンビアの女性たちは、歌を歌うのが上手です。私が教室に入るなり現地の曲で迎えてくれました。明るい笑顔で迎えられましたが、集まった女性たち全員がHIV陽性の患者さんで、自助グループを作って活動していました。「私の夫は1996年に亡くなったの。その時すでに身ごもっていた赤ん坊も生後まもなく亡くなったわ。そのうち私も結核に罹り、親戚にHIVのテストを勧められ、去年テストを受けHIV陽性と告げられたわ。」35歳になるハリエットは淡々と自分のことを語ります。31歳になるエドナは堂々と私の目を見ながら語り始めました。「私がHIV陽性と分かったのは今から8年前。家族や親戚からこの家から出て行けと言われ、食べ物も別にされたわ。当時23歳だった私にはどうてい信じられないことで、このまま私は死んでいくのかしらと絶望的な気持ちにさせられたわ。」

赤ん坊を抱き母乳をあげているお母さんが立ち上がり「この子もHIV陽性なの」とこれまでの自分の生い立ちを話してくれました。20人の女性達は、次々と自分の事を語り始めました。

1991年、ザンビアで初めてHIV陽性を名乗り出たウィンストン・ズル氏。その時ザンビアの人々は衝撃を受けたと言います。差別と偏見が錯綜する中、彼の勇気は、ザンビアの人々の心にほんの少しだけ風を通しました。しかし、根強い差別は生活の

中まで入り込み、両親を亡くした子供達まで及びました。

2004年、この国にもいよいよ本格的に抗レトロウイルス薬(ARV)が導入されました。これまで、政府は予防を中心に対策を講じていましたが、このARVの導入で、これまで約2万9千人の人々が服薬を開始しました。その効果に疑心暗鬼であった人々も、日に日に元気になる周囲の人を目の当たりにして、閉ざしていた殻を破り希望を持ちつつあります。しかし、ARV薬の価格は年間約300ドル、現在ザンビア政府は補填を行い患者1ヶ月あたり約8ドルまで価格を下げていますが、ザンビアの人口の7割が1日1ドル以下で生活している現状ではまだまだ手の届かない高価なものです。

集まった女性達の多くは、ARV薬の服用を開始しています(アメリカの支援で、首都のクリニックは無料配布を開始したからです)。皆口々に、元気になった様子を得意げに話します。

「私のCD4カウント*は350まで上がったわ。最初は120だったの。」「結核の治療を終了して、すっかり元気になったわ。」「話はさらに進み「ろうけつ染めを習いたい」「稼いで子供達を育てなくちゃ。トマトを箱ごと買ってビジネスを広げたいわ。」「25Kg袋の小魚を買って小分けにして売ると儲けがいいのよね。」「私は、カウンセリングの研修を受けたいわ。同じような境遇にある人を支援したいもの」彼女たちの夢は広がります。

エドナに「今でも差別を受けるの?」と質問してみました。「もうそんなものあっても気にしないわ」と彼女は一笑しました。彼女たちの笑顔は、透けるようなザンビアの空のように広く深く、そして悲しみをも吹き飛ばす力強いものでした。これまで深く根付いた差別や偏見は、このような人々の勇気や希望によって少しずつ確実にそして切り開かれるものなのだと思います。

*CD4カウント：CD4陽性T細胞測定値で人の免疫力を図る指標の一つ